

大通公園を望む窓辺から

人生は観覧車のように

常任理事 櫻井 晃洋

フランシス・ベーコンも徳川家康も、人の一生を「道」に例えた名言を残した。中島みゆきも自転車のよう走り続けるしかない命を歌った。子供の頃に楽しんだ「人生ゲーム」も波瀾万丈の旅路だ。しかし、考えてみるとあのゲームのゴールは大富豪になったり破産したりで、決して人生は終わっていない。要は「半生ゲーム」だ。本当のゴールは見えていない。

道は目的地にたどり着くためにある。人生が「道」ならば、人生の意義は「前進」だ。たしかに時間は一方向にしか進まない。ただ、一方通行の人生観だと、歩みが進まなくなるのは文字通り「進歩」の終焉と否定的に捉えるしかない。だが中島みゆきは「時代はまわる」とも歌っている。そう、人生は進むものではなく回るものなのではないのか。例えば遊園地の観覧車のように。

人の一生は、何も見えず何もできない瞬間から始まり、そこから成長して身体能力も知的機能も高まっていく。遊園地の観覧車に乗り、ゆっくりしかし着実に眼前の世界が広がっていくのに似て、人生の前半も観覧車の前半もわくわくの連続だ。

しかし人生には必ず下降局面がある。どんなに健康に自信があっても加齢に伴って身体能力や知的機能が低下する現実からは逃れられない。観覧車に乗り、頂点を過ぎて徐々に下がっていく時は、景色を楽しみながらも一抹の寂しさを感じる。もっと時間がゆっくり流れて欲しいと願う。老いの寂しさに通じるものがあるかもしれない。それでも、周回を終えて乗った時と同じ何も見えない地点に戻って来ると、誰もがこの小旅行に満足してにこやかにゴンドラを降りる。全体の半分が「下降」だったにもかかわらず！

ひとりひとり人生という観覧車の大きさも違えば回転の速さも違うだろう。それは変えようがないが、すべての人が途中下車せずそれぞれの観覧車を楽しめる、楽しかったねと言ってゴンドラを降りることができる。それを手伝うのが医療の役割ではないかと思う。

在宅へシフトって大丈夫？

監事 藤瀬 幸保

社会保障費の削減努力として、要介護者の病院や介護施設から在宅へのシフト政策が進められています。その背後には介護職場の慢性的人手不足の現状もあります。在宅と簡単に言いますが介護に加え、炊事、洗濯、買い物などの日常生活も家族に依存するということです。このことが「介護離職者10万人」発生の原因ともなっていると思います。加えて現在の在宅制度は、少数の医師の使命感によって維持されているようにも思えます。将来後継者は大丈夫なのでしょうか。これから要介護者が増加していくのですから、在宅へのシフトで介護離職者が増えれば社会保障費増が抑制されても、家族の収入は減り歳出削減が進むでしょう。国全体の財政に及ぼす影響はどうなんでしょうか。

今後は未婚の高齢者も増加するのでですから、在宅シフト政策を転換して、介護が必要な人は施設に入所させ、少ないスタッフ数で要介護者に効率よく対応できる体制を組んでいく方向へ知恵をしばってはと思います。

一方、今まではあまり外国人労働者の受け入れには積極的でなかった日本が、2018年には特定技能者として外国人の方たちを多数受け入れるということになったようです。しかし来るのは我々と同じ人間です。習慣や文化が違うだけで家族もいるし病気にもなる、幸せにもなりたいよね。それなら我々と同じ生活上の権利を保障しなければならぬんじゃないのかな。それはできているのでしょうか。日本はいわゆる「自己責任」論や自己中心的で弱者に冷たいなどの風潮から見て、結構不寛容な世間じゃないのかなと思います。

日本の高齢者をお世話しに来てくれてありがたいの感謝の心がなければ成り立たないんじゃないのかな。特に介護現場ではそう思います。大丈夫？

